

修復依頼作品「木戸孝允肖像画」からわかること

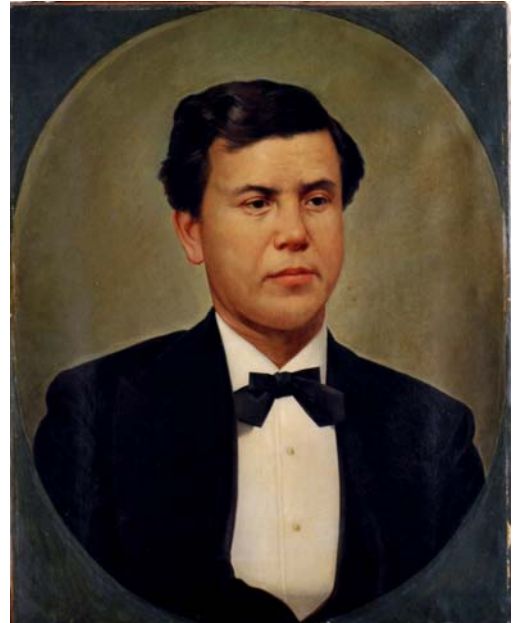
— 吉備国際大学 文化財総合研究センター 事業の一成果 —

下山 進・丸岡 佳美（吉備国際大学）

木戸孝允について

木戸孝允は、明治維新三傑の一人。長州藩の医師（和田家）の子として生まれ、桂家の養子となり「桂小五郎」の名で幕末を奔走、最後は「木戸」を名乗った。

木戸孝允は、岩倉使節団に随行し、1871～73年にかけて欧米諸国を視察した。1873年5月8日～同年6月3日にかけてイタリアを訪問、その間5月12日～20日までローマに滞在した。

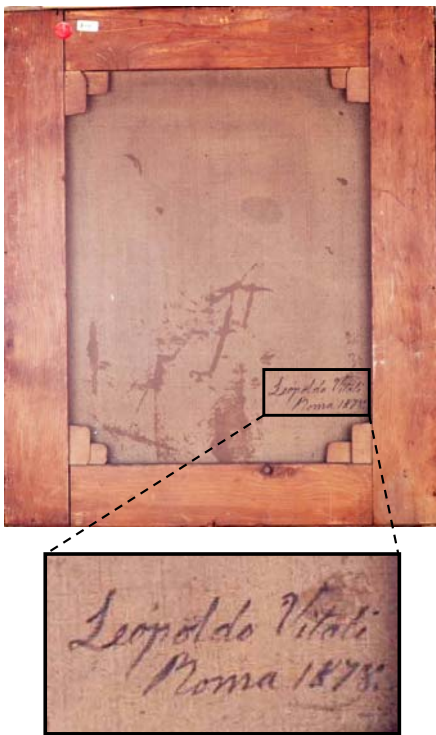


油彩画「木戸孝允肖像画」

木戸孝允の肖像画について

作品の裏から「1878年（明治11年）」に画家「レオポルド・ヴィターリ」によって、イタリアの「ローマ」で描かれたことがわかる。すなわち、木戸がイタリアを訪問してから5年後に描かれた油絵である。

この作品は「くさび型の木枠」に留められている。キャンバス地（麻布）を張った後、四隅を“くさび”で調整することによって、釘を打ち直すことなくキャンバス地に生じた緩みを調整することができる。当時、ヨーロッパでは一般的な木枠として普及していたが、日本では普及していない。



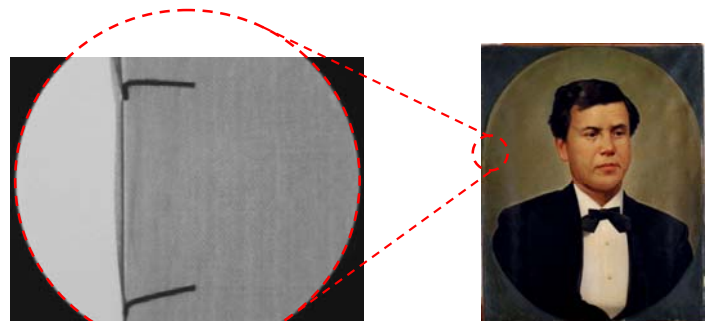
油彩画「木戸孝允肖像画」の裏面

軟X線透過画像解析

作品の全体構造を把握するため軟X線透過画像解析を行った。

物体にX線を照射すると、X線は物体を透過する。しかし、物体を構成している元素（元素の質量）あるいは密度（厚さ）の違いによって、X線の透過度に差が生じる。その透過度の差は、透過画像の黒化度の差となって現れる。

X線透過画像によって本作品を木枠に留めた極めて稀な釘（L型に折り曲げた針金）が確認された。木枠の側面に長さ約2センチのL字型の留金（鉄製）が約5センチ間隔に打ち込まれている。



軟X線透過画像によって確認されたL字型の留金「釘」